

新岡垣風土記

第458回

町の県指定文化財の紹介①

—高倉神社の銅造毘沙門天立像や樟と綾杉—

岡垣歴史文化研究会 入江 東樹

銅造毘沙門天立像（仏像）が昭和33（1958）年、県指定有形文化財に指定された。

この像の背面に記されている文（銘文）によれば、須藤駿河守行重を願主として、延徳3（1491）年に、大江貞盛らによって、築造された。

願主の須藤駿河守行重は、今の町内の手野に居住していた有力者だったという。

大江貞盛は、筑前芦屋（現芦屋町）の鋳物師だった。当時、芦屋釜（茶釜）は、全国的に名を知られていた。

像の総高は約3mで、邪鬼（仏教の外敵という）の上に立っている。身に甲冑をまとい、武将の様な姿で、顔は憤怒の表情をしている。右手に武器の三叉（鉾）を持ち、左手に宝塔を持っている。

本来の仏像は、インドでの釈迦（仏教の開祖）の姿を像にした「釈迦如来」像だったらしい。

仏教が広まるにつれ、それまで信仰されていた神々が仏教に取り込まれていったという。

それにつれて、仏像の種類が増え、現在では、大きくは「如来」「菩薩」「明王」「天」の4つに分けられている。

そのうちの「天」は、インドで神とされていたものが仏教の守護神に変身したものが多く、仏教で「天」と言えば神さまのことで、四天王や帝釈天、弁財天、吉祥天などが仏教に取り入れられて仏像になったという。

その1つの四天王は4つの仏像（多門天や増長天、持国天、広目天）に分かれ、甲冑で身を固め、外敵から仏教を守るために、

東西南北の方位を守る役をするという。これらの像による守り方が3通りあって、多門天だけで祀られる場合は、「毘沙門天」という別名である。高倉神社の仏像がそれである。

高倉神社に仏像があったのは、江戸期まで「神仏混合」だったので、神社にも仏像が祀られていたからである。

明治の新政府は「神仏分離」の方針を取り、神社の中から、仏像等を排除するようになった。

高倉神社でもその動きがあったので、毘沙門天立像を売却する動きが出たらしい。手野や高倉の住民らの反対で、売却を免れたという。

それに、前記のように願主が手野だったので、手野が引き取る話もあったが、実現しなかった。

とにかく、神社に置くわけにはいかなかった。

明治31（1898）年に刊行された「大日本名所図録（福岡県之部）」の中で、

高倉の龍昌寺の境内に毘沙門天立像の様子が描かれている。神社からそこまで近かったので、一時期移動させたようだ。



▲岡垣歴史文化研究会会報「木綿間」(39号)の表紙となった銅造毘沙門天立像の写真

その後、高倉神社に戻され、神社の東側の高台に設置された。平成26（2014）年の台風の影響で、像の頭部が落下するなどのため修理された。

現在は社務所のそばに覆屋を建て、そこに設置されている。

高倉神社境内の樟5本と綾杉1本が県の天然記念物に指定された。樟の樹齢は約400年と推定されている。昭和29（1954）年に指定された。

綾杉の樹齢は70年以上だと推定されている。これまで2度の火災に遭ったそうだが、生き続けている。昭和38（1963）年に指定された。

【参考文献】

- 「岡垣町史」
- 「仏教のすべて」(日本文芸社)
- 「高倉神社と毘沙門天」(小川賢執筆)